



# 震災時の 他校と本学の取り組みと JLCの課題

中井陽子

東京外国語大学 留学生日本語教育センター

[ynakai@tufs.ac.jp](mailto:ynakai@tufs.ac.jp)

# 1. はじめに

2011年3.11東日本大震災後

本留学生日本語教育センター(JLC)で  
すべきことは？



- ◆ 2011年3.11後の本学での取り組み  
他大学での取り組み
- ◆ 1995年1.17阪神・淡路大震災後の他大学の  
取り組み



今後のJLCの課題を検討

留学生自身が「災害対応マニュアル」を  
主体的に協働で作る重要性を述べる

## 2. 本学の取り組み (3.11東日本大震災後)

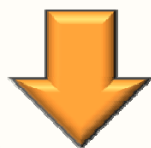
- ◆ 緊急対策本部設置
- ◆ 「多言語災害情報支援サイト」開設
- ◆ 被災した学生と被災地への支援
- ◆ 被災地での学生ボランティア活動の支援
- ◆ 多言語の災害時マニュアル作成
- ◆ 多文化防災のパネルディスカッション など

本JLC

- ◆ 防災マニュアルの作成と各教室への設置

## 2. 本学の取り組み (3.11東日本大震災後)

- ◆ 震災直後の留学生寮の  
日本人チューターらの不安



震災時、寮の留学生やチューターが  
適切に行動するための対策が必要

# 3. A大学の取り組み (3.11東日本大震災後)

秋田県A大学 日本語教員A氏への取材

- ◆ 震災直後：職員が寮に  
安否確認と食料配布へ
- ◆ 寮：警備員とRAが常駐
- ◆ 震災5日後：「不安軽減のための留学生  
ミーティング」実施

# 4. 阪神・淡路大震災(1995.1.17) 後の取り組み

松田陽子教授(兵庫県立大学)への取材と  
関連文献

◆1995年の震災後:

緊急時言語対策研究会を発足

震災時の留学生の困難点を調査

(cf.松田ほか1997)。

# 災害時の外国人の困難

- ◆外国人「**情報弱者**」:地震の知識がない、日本語が不自由、ネットワークが少なく、物的被害や不安からの精神的ショックに悩まされた(松田ほか1997)
- ◆差別・摩擦を経験する外国人達が  
災害時に支援を受けようとしなかった
- ◆避難所で外国人が差別された(松田1998)

# 災害時の外国人の交流 & 活躍

- ◆ 困難な状況の中で外国人が日本人と緊密な付き合いをして、互いにプラスイメージをもった(松田1998)
- ◆ 「**媒介者**」の存在: 外国人と日本人の両コミュニティを繋いで適切な情報入手しつつ生活支援を行う(松田1998)



◆松田(1997):

「震災関連重要語彙リスト」作成

◆「余震」「警報」「避難」「火災」等の最重要語彙

基本的な防災の知識

⇒日本語クラスで扱うべき

◆松田(1996):

マニュアルにして参照可能にすべき

# 震災時対応のための留学生教育

松田(1997:20-22)

(1) 語彙の学習

(2) 地震の際の対応や地震に備えるための知識  
の学習

(3) ニュースの聴解力

(4) 情報や救援を得るためのコミュニケーション能力

(5) 情報や支援の得方や安全な行動のための  
社会文化能力の育成

## 「やさしい日本語」(佐藤1996)

- 「初級日本語程度のことばを用いた、緊急報道用の文」
- 3日間程度、外国人が自身で生活が賄えるように、ラジオ等で**必要最低限の情報**を**効率的に**伝える
- 外国人が母語で得られない情報を得たり、「やさしい日本語」が分かる外国人が母語に翻訳したりすることが可能になる

## 「やさしい日本語」の特徴(松田1996)

- 活字の大きさ・読みやすさ
- 振り仮名
- 重要な語彙の解説
- 日常語彙の使用  
(ただし中国語話者には漢語使用)
- 短文・簡明な文
- テロップ使用・図示
- 長めのポーズ
- 重要情報の繰り返し・言い換え など

# 「やさしい日本語」

松田氏：あくまでも物資・援助・防災等の  
情報へのアクセスを伝えて  
情報と情報を繋げる役割

社会の一人一人

「やさしい日本語」で外国人に情報を  
与えていく**助け合いの姿勢**

# 「自助、公助、共助」の姿勢



**公助**



大学の体制  
寮の管理人配置など

**自助**



自身の身は  
自身で守る



**共助**

留学生同士  
日本人学生  
地域の人達



ネットワークを構築

社会の一員として役立つ存在

## 5. まとめとJLCCの課題

(1)「公助」の体制やマニュアルの整備:

(情報・物資・心理等の面から)

災害時の大学の対応

●情報伝達の面:

多言語や「やさしい日本語」で、

防災の基本知識や重要情報を伝えていくべき

## (2)留学生の「自助」や「共助」:

主体的に必要な情報にアクセスし、

- ・ 自身の身を守る (自助)
- ・ 情報提供者や媒介者となって 他者を支援 (共助)



「災害対応マニュアル」を協働で作成  
防災について主体的に学ぶ



- ・ 「やさしい日本語」等で他者に伝えて支援
- ・ 自らがリーダや媒介者となる (共助)



# 参考文献

- 林春男(1999)「緊急時コミュニケーション 災害時の心のケア」『月刊言語』Vol.28 No.8, 70-77.
- 池田玲子(2007)「第1章協働とは」池田玲子・館岡洋子(著)『ピア・ラーニング入門－創造的な学びのデザインのために』1-19. ひつじ書房
- 庵功雄(2009)「地域日本語教育と日本語教育文法－「やさしい日本語」という観点から－」『人文・自然研究』第3号, 126-141.
- 金井里弥(2011)「東日本大震災における留学生の軌跡－求められる支援」多文化関係学会第10回年次大会 提示資料
- 松田陽子(1996)「非常時におけるコミュニケーション③多様な外国人に対する情報提供を考える」『月刊言語』Vol.25 No.3, 95-100.
- 松田陽子(1997)「非常時の対応のための日本語教育－阪神大震災関連調査からの考察－」『日本語教育』92号, 13-24.
- 松田陽子(1998)「外国人住民と日本人のプロダクティブ・コミュニケーションに向けて－阪神・淡路大震災に関わる調査研究から－」『人文論集』第34巻 第1・2号, 93-114.
- 松田陽子ほか(1997)『阪神・淡路大震災における外国人住民と地域コミュニティ－多文化共生社会への課題－』江川育志研究グループ 神戸商科大学
- 松田陽子ほか(2000)「災害時の外国人に対する情報提供のための日本語表現とその有効性に関する試論」『日本語科学』7, 145-159.
- 佐藤和之(1996)「非常時におけるコミュニケーション②外国人のための災害時のことば－Easy Japaneseの提唱とラジオの効用－」『月刊言語』Vol.25 No.2, 94-101.